

羣書類從

三百五十三

內閣文庫			
和	一八六九〇	六六六	三六函
書	號	冊	架
類			

內閣文庫			
和	一八六九〇	六六六	二五函
書	號	冊	架
類			

內閣文庫			
番號	和	18690	
冊數	666 (438)		
函號	215	3	

雜抄 十七

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Handwritten text in vertical columns, including a rectangular stamp at the top center and a large, faint, illegible mark in the middle.

Blank page with a large, faint, illegible mark in the center, possibly a watermark or bleed-through from the reverse side.

君幸書類從卷第三百五十三

淺草文庫

檢校保己一集

蹴鞠部上

承元御鞠記 記者未考

承元二年己卯十二月十三日壬子天晴時属清和世樂靜謐

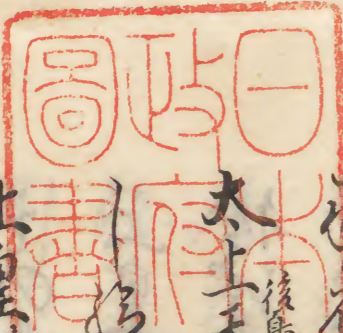
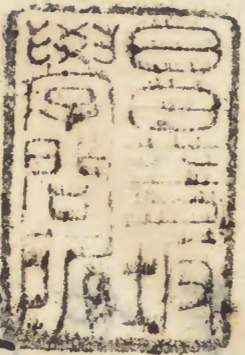
後鳥羽 太上天皇機務乃餘閑頼實前大相因郁芳里第より除年

多ひて蹴鞠の宴あり蓋是

上皇神聰稟天衆飛雲軼人々多ひて蹴鞠さうに妙哉

あうそよふのかし是よりあうそよふ七言當世究切の人

洋感のぶよをうけ我道とてくその長老と稱し



つこ旨勅状に聞らりて今日此處にありて名を名と
とととととととととととととととに賞賜をくりし
との也

上皇とてしめたまはしむるを諸人より及ふて貴
族は不備をあくハ人をめて上中下は二品は
自餘めし小ゆつうはふの又多し一も儀南庭に
なはしむ一も南階の西にはよりにならふ三回
やとつうも東西妻廂青銅ありてはらぬを
うたふ所相檜朴楡の環材はより人もし
まはしむらふ華構と致はしむ物金銀は
とておけ

しにうの黒漆とて高欄はうは四回小翠簾はの
てまはれあをかりしとてまはれあをかりし
とてはうは天井はうの漆はよりて兼慶は撒と清
二枚とてくおきて龍鬚へりそのうは唐錦乃茵を供す
うらびろとてしむりては西二箇間は月御おま
度とてはうとては収はしむくおきて唐燈へりの
おまをば板板下北面の所とては二枚はしむく
おまをば板板下北面の所とては二枚はしむく
おまをば板板下北面の所とては二枚はしむく
おまをば板板下北面の所とては二枚はしむく

沛服一具三重をり物乃ハ袴衣直衣 地自行桐のやりえこ成
あときこ紫乃あときをり

うとどまははさぬさうさうさうはうらまひす一ハ単

おるさうはぬがうらほおひはし履ぬさひまうたあさ

乃三重畏小はうまはう糸の鞠一丸とく 念成りてまんとあ
やままり成るひと

あ一地のほきさうひ一さ 葉地のあきさうら
うてまはひなぬひめは伏を

河まよらうのかえそめうら枝よ付てきとほひそよ下

の座あう一くひいさひをすまふ二本敷よ人ふや

さあくおあお白あ 葉束一具成をる敷よ人か
さあさぬさうら足入す

さあさぬさうら足入す一乃おぬららぬひ履報

報一はやのまひ ひささひと白をあく
ひささひと白をあく

一五やうく小面のなはり景のまうま あう一但あをる
まといを小

成りらぬ僧一口のまうぬらりもさ せとわらふ一人
はりらぬ僧

乃料正あれ 後 綿神全網
ましんをさう 己と自録みか さうあ
あ

但公卿の料む この畏敷之人の料白あ
とん や其畏

小當の危うり畏を あく 是はおさ む南 是て二回の登

二字とあ ひ西書
申下各八人の座と
ひ翠竹をりて

撫 とまはねをりて蓋敷
とん口面よをり 一伊豫葉と

う はの布は
まは魚のま
と六枚は 一く 東西
人別小
膳

とす人 葉束
報細を 是但下 八人
敷 あ 一沛
亦の西よ

間の登 一字は
ま 西園書
はら
か
はら
む ねの ま
は
ら
ま
を
り
て
葉
束

をうく あつちのまのまゝとぬりてひのけの
を後とのまゝに御座りてはなれど かしらひのけの
六枚とく 事ある かの座をひのけのくはらきとく
大后の御所 中門の南の廊を御座りて御座りてはなれど
御所 女院の御所物も御座りてはなれど
北はひのけのくはらきとく 御所 二堂はひのけのくはらき
とく 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
小志 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
く 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
南庭東の御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
とく 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど

上皇臨幸 御所 侍居少司の業か供を御所東の西の小寝

敷乃南おとし 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
同 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
上皇出御次相國 御所 御座りてはなれど

御の座 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
儀 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
儀 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど

前降奥守 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
近衛権中 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
同 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど

時正五位 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど
仍 御所 御座りてはなれど 御所 御座りてはなれど

散位従五位下源朝臣重幸行預寺別當法橋道誓大法師金壽
 醫王丸乃登子下八人正四位下近衛中將兼春宮亮橋
 磨介藤原朝臣頼平從五位上右衛門權兵衛藤原朝臣忠清正
 六位下右中宮權大進藤原朝臣宗朝正五位下右近衛權兵衛
 原朝臣家綱兵衛少從五位上兼武藏介源朝臣家長武藏兼藤原
 兼人道誓子千熊丸義基孫地下少將兼左兵衛少輔兼平
 朝臣兼藏兼一族澄金剛院の執事雲顯をよひ子たりて
 小をりくかりやり倉候と陸陽師以下新羅野乃夏元
 院經尾房の類慢乃らの座よ候又は同云仁乃善乃正三位
 陸奥出羽按察使藤原朝臣泰通正三位行權大納言藤原朝臣

云種之正三位行中納言藤原朝臣定輔卿兼藤原正三位行修理大夫
 藤原朝臣仲經乃也著座乃る乃孫て人較以定らると以人
 と也朝小條て或は河乃とも推兼と也此外前皇后女女女
 之兼乃左衛督教長乃別當保家乃之正三位行仲乃阿波在
 親兼乃大宰乃式親兼乃右衛督隆清乃刑部乃兼乃出小
 座よはり以東廊乃兼乃河乃次左中將通方朝臣神子
 式をらて兼と相國乃の座を兼らて清而よすともよ
 て之れを併大道守りて後殿乃兼兼乃之小候大通方朝
 臣神子以道給乃ら有右乃之神子以もらて兼乃忠信乃
 之不別盡をり一就を初中下乃兼勅盡乃後乃次

卷三十三

装束はどりのめ返に次後味を信谷能駒一匹を給上中の子
信谷をりつひ下北國御府が東中門より川に下りて此のふれ物より
八人づつとをさし
 あつりてこれを給ふ所をめぐり綱をさつて一洋軍中將
 忠信の以下世之人とくくは忠信は浴とありてくくはあ
 らしむるさつては忠信のりひるたをさつて忠信朝臣とされし信
 忠は家長朝臣の馬小紀是はけり種種朝臣も亦お花
 茂是とうげり依るやこりお内務権次重輔云ありは鞍
 かす人び優せられて細馬つ道と給ふくは信をりて又信茂
 神主幸平朝臣とて思喚よ急して馬と浴と信をりて綱
 をさつて深く二洋軍中將平是はけりある家はうきとあり

思葉の身をひるをさつて宿者ありて人れはあり
 てさつてあふみおんりうらはさつて門外ありてあつり
 あつりてさつては信をり給つり

繪

此間より中津守皆悉く恩賜の装束とありてまのれ
 庭のあひりてお花権次忠綱のり給つてさつて出で
 本江下にさつて次中將を鞠つてありて門下八人あは鞠

家綱

左近中將頼平朝臣

右近中將忠清朝臣

中宮権大進宗行

右近中將監家綱

兵庫頭家長

武藏

年人

千熊丸

繪

次中八人上鞠伊時朝臣

右近中将伊時朝臣

右近中将範茂

左衛門佐清親

常陸介隆重

散位重幸

法橋道玄

大法師全壽

醫王丸

繪

次子又忠綱上科の正鞠標を持来と家長朝臣是とあり

二足の内法清前子進上干時法同ゆく扇で微雨まをる

教重丸白紗らりびやめ一枝の紅梅柄小乃とる負教方松の

制衣陰湯うらととあとない志れてよ右の平あらしをほひ風

流るるより人し進退の儀■柱のすゝよりと妙也俯仰乃

りとも惟柳乃新らりともあくもわたり目志りうらととあは

けらうらほもくをえんといふその教百々満射

上皇まの成法袖よりけしめて忠信御よたす一被御

忠瑞をあらしてこれを給次子相國作をうけ給く忠綱小位

て銀の扇の枝とまよして上七人あつらひもよれ分て取

びりて醫王丸をたらしく是ととあし道玄一身に披群

をんく教の威威とあり續を孫ふるが人のく
有りといふは自ら漸之のそ普陽より一か一遊樂
ふいまのれくしてあるのそ還幸はうれし

上皇

宰相伴將忠信卿

右近將有雅朝臣

前隆具守宗長朝臣

右近少將雅經朝臣

小記

山加良

寧王丸

繪

十四日三月のふしに榆 ■ ありとれて萍思ふくとも

と眺みは遠方遠はあめふくそねく都芳里第一陳幸

相國をこれとていふはさうのて上皇のまをうらみあま
すふら南庭より蹴鞠の事あり及ふそのみかいてく
うへてとあとの無くすられあり

十五日甲寅天晴今朝上皇のまをうらみあま出して又蹴鞠
の無ありとて相國よりまをうらみ小純波の鞠とてま
をうらみ春宮権亮頼平朝臣右近少將家嗣お南庭よりま
まの忠信のまをうらみ寧王丸をあらはれしり此庭の別成
とあはれとあはれをうけお柳今夜の儀ありとて春代の勝り
を戦の一遇あるものなり周穆王の臨池は余せしむる
しく白雲に謡を奏と漢武帝の汾水よりあうりあり

秋風のさそひをうけつゝ小暑の首と云ふも人の心
されは海もいんもつゝみすゝの一端はあつゝと
後學りもあつゝと

繪

臣泰通等言盡忠之道忘犬馬之情抽節之誠何異
葵藿之義人臣無貳蓋以如斯臣泰通等誠歡誠喜
頓首死罪死罪伏惟

太上天皇應一千之嘉期登九五之尊位明齊三象
天下為之靜謐化周八縻海內因茲又安遂乃三十

六宮之月前瑩謙光而道瑤圖三十六洞之花下富
仙齡而樂瓊砌德惠之被近古也唐政任其諮詢藝
葉之在長葉也羣官仰其聖哲允厥睿聰誰不歡呼
走蹴鞠者萬春之初興千年之永戲也暖日遲之
晚倚龍鱗之柳而定前後和風漫之之時陰雞冠之
木而爭雌雄訪之異域則起於黃帝感于漢皇尋之
本朝忽起於延喜感于天曆誠是聖代始之明時好
之者也我君忝催此遊已長其藝臣等謬傳家塵
久侍鞠場伏拜日新可謂天生若不上雅稱於當時
恐猶忌勝事於後代宜奉號此道之長者以令著其

藝之獨勝漢世宗之好圖碁也仙客降號娛戲焉唐
太宗之工隸書也群臣賀兮拜舞矣稱羨之餘不避
至尊以昔思今彼猶瑣焉不堪欣躍拜表以聞臣泰
通等誠歡誠喜頓首頓首死罪謹言

承元二年四月七日 正三位行陸奥出羽按察使臣藤原朝臣泰通

前陸奥守從四位上臣藤原朝臣宗長

從四位行近衛權將賀權臣藤原朝臣雅經

淡路守藤原朝臣宗成
淡路守藤原朝臣宗成
淡路守藤原朝臣宗成
淡路守藤原朝臣宗成
淡路守藤原朝臣宗成

貞治二年御鞠記

一名夜うりまの日記

後普光園撰改 貞基公

貞治二のうら二月十日は海浪志のうら
因風せよ海邊に吹く浪は此抄の名をうらと
けり昔もこのうらをうらと名をうらと
幾よこのうらをうらと名をうらと
あうらと名をうらと名をうらと
竹のうらと名をうらと名をうらと
はうらと名をうらと名をうらと